

# 宇陀を駆けた人々

## 松浦武四郎篇2

### 北海道の誕生

天保14年（1843）、武四郎は、ロシアが勢力を広げるために蝦夷地（えぞち）を狙っていることを知りました。日本の危機を感じた武四郎は、ロシアの南下政策によって緊張が高まっていた蝦夷地を自らが調べ、その様子を多くの人に伝えようと決意し、弘化2年（1845）から安政5年（1858）まで6回にわたって調査を重ねました。危機からどのように日本を守るべきかを考え、そのためには、どこまでが日本で、その国境に近いところかどうかのようなところであるかを明らかにしなければならないという思いからの行動でした。

武四郎は、蝦夷地の詳しい地図を作製したほか、アイヌ民族の文化を紹介することにも努めました。また武四郎は、蝦夷地の調査を通じてアイヌ文化に触れ、アイヌの人々を尊重することも訴えています。

時代は江戸から明治へと変わり、武四郎は、蝦夷地に詳しい第一人者として明治政府の一員に迎えられました。武四郎は、明治2年（1869）7月には、蝦夷地に代わる新しい名称の提案を明治政府に行っています。その候補にあがったのが「北加伊道」「日高見道」「北海道」「海島道」「東北海道」「千島道」でした。最終的に「北加伊道」の「加伊」が「海」となっており、「北海道」と命名されました。アイヌ民族を示す古い言葉「カイ」を使って「北のアイヌ民族が暮らす大地」という思いを込めた「北加伊道」から「北海道」の名前が誕生しました。また、武四郎はアイヌ語の地名に基づき、国名（後の支庁、現在の総合振興局と振興局）や郡名の選定にも関与しました。しかし、明治政府の北海道開拓政策は、アイヌの人々に対しては厳しく、この政策を巡って反発した武四郎は、辞職し政府を去りました。

晩年は、趣味の古物収集のほか、東海、近畿、四国、山陽、九州などを巡り、大峯奥駈修行や大台ヶ原探査、富士山登頂などを行うなど、旅や探査への情熱は衰えることはありませんでした。探検家の武四郎、宇陀の街道も歩きました。

